

日蓮大聖人御書全集

なんじょうどのごへんじ

南条殿御返事

しろむぎくよう こと

(白麦供養の事)

新版
1844
〜
1845

なんじょうどのごへんじ しるむぎくよう こと

南条殿御返事（白麦供養の事）

けんじがんねん

建治元年（75）

7月2日

54歳

南条時光

がつ にち

さい

なんじょうときみつ

しるむぎひとたわら

しょうしるむぎひとたわら

かわ海苔ご

帖

おく

た

そうら

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五じょう、送り給び候

お

い了わんぬ。

ほとけ

みでし

あなりつそんじや

もう

ひと

幼

仏の御弟子に阿那律尊者と申せし人は、おさなくしての

みな

によい

もう

によい

もう

こころ

思

宝

御名をば如意と申す。如意と申すは、心のおもいのたから

降

よ

由

ほとけ

問

たま

をふらししゆえなり。このよしを仏にといまいらせ給いし

むかし飢

世

えんがく

もう

しょうにん

稗

飯

かば、昔うえたるよに、縁覚と申す聖人をひえのはんを

くよう

故

こた

たも

もつて供養しまいらせしゆえと答えさせ給う。

かしようそんじや

もう

ひと

ほとけ

次

えんぶだいいいち

そう

迦葉尊者と申せし人は、ぞく 仏にとき ついでも閻浮提第一の僧な

り。こがね 俗にておわせし時は長者にて、くらを六十、そのく

らに金ひやくしじゆう を百四十こくずつ入れさせ給う。たも それより外の

宝 もう

ひと

先

生

おんこと

ほとけ

たから申すばかりなし。この人のせんじようの御事を仏に

問

たま

昔

飢

世

麦

といまいらさせさせ給いしかば、むかしうえたるよに、むぎの

飯 いっ 杯 くよう

とうりてん

せんべんう

はんを一ぱい供養したりしゆえに、切利天に千反生まれて、

いましやかぶつ あ

そう

なか

だいいち

たま

今釈迦仏に値いまいらさせ僧の中の第一とならせ給い、

ほけきよう こうみようによらい

な

授

たも

てんだい

法華経にて光明如来と名をささずけられさせ給うと、天台

だいし もんぐ だいいち

記

そうろう

大師、文句の第一にしるされて候。

案

かしようそんじや

むぎ

飯

かれをもつてこれをあんずるに、迦葉尊者の麦のはんは

こうみようによらい

たま

いま

檀

那

しろむぎ

いみじくて光明如来とならせ給い、今のだんなの白麦は

卑

ほとけ

そうろう

ざいせ

つき

いま

つき

いやしくて仏にならず候べきか。在世の月は今も月、

ざいせ

はな

いま

はな

昔

くどく

いま

くどく

うえ

在世の花は今も花、むかしの功德は今の功德なり。その上、

かみいちにん

しもばんみん

憎

さんちゆう

飢

死

上一人より下万民までにくまれて山中にうえしにぬべ

ほけきよう

ぎようじや

不便

思

さんが

超

き法華経の行者なり。これをふびんとおぼして、山河をこ

渡

送

給

そうろうおんこころ

むぎ

こがね

えわたり、おくりたびて候御心ざしは、麦にはあらず金

こがね

ほけきよう

もんじ

われ

まなこ

麦

なり、金にはあらず法華経の文字なり。我らが眼にはむぎ

じゆう

羅刹

麦

ほとけ

種

ご

覽

なり。十らせつには、このむぎをば仏のたねとこそ御らん

そうろう

候らめ。

あなりつ

稗

飯

変

兔

阿那律がひえのはんは、へんじてうさぎとなる。うさぎ

変

しびと

しびと

変

こがね

ゆび

抜

へんじて死人となる。死人へんじて金となる。指をぬきて

売

出

おう

責

とき

しびと

うりしかば、またいできたりぬ。王のせめのありし時は死人

尽

くじゆういつこう

しやく 摩

男

となる。かくのごとくつきずして九十一劫なり。積まなん

もう

ひと

いし

こがね

こん

粟

おう

と申せし人の、石をとりしかば金となりき。金ぞく王は、

砂

黄がね

たま

いさごをこ金となし給いき。

いま

麦

ほけきよう

文

字

によにん

おん

今のむぎは法華経のもんじなり。または女人の御ために

鏡

身

飾

なん

はかがみとなり、みのかざりとなるべし。男のためには

鎧

兜

しゅごしん

きゆうせん

よろいとなり、かぶととなるべし。守護神となりて、弓箭

だいいち な 取

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

の第一の名をとらるべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

きようきようきんげん

恐々謹言。

しちがつふつか

にちれん かおう

七月二日

日蓮 花押

なんじようどのごへんじ

南条殿御返事

お もう

世 なか

とき なにごと

追つて申す。このよの中は、いみじかりし時は何事か

見 とうじ

危 見

あるべきとみえしかども、当時はことにあぶなげにみえ

そつろつ

歎 たも

候ぞ。いかなることありとも、なげかせ給うべからず。

思 切 所 領 違

ふつとおもいきりて、そりようなんどもたがうことあらば、

よろこ

思

打

嘘

渡

いよいよ悦びとこそおもいて、うちうそぶきてこれへわた

たま

しよじ領

ひと

過

そうろう

とうじ

らせ給え。所地しらぬ人も、あまりにすぎ候ぞ。当時、

筑

紫

向

歎

ひとびと

思

つくしへむかいてなげく人々は、いかばかりとかおぼす。

みな

にちれん

上

悔

たま

故

これは皆、日蓮をかみのあなずらせ給いしゆえなり。